

身体表現と音楽表現の融合を目指して —保育者養成校における保育内容領域・表現の演習授業を通して—

松井典子*1), 高橋仁美*2)
1) 2) 滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Toward the Fusion of Body Expression and Music Expression
—Expressiveness and Active Learning at a Nursery Teacher Training Institution—
Noriko MATSUI¹⁾, Hitomi TAKAHASHI²⁾

1) 2) Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：本稿では、保育者養成短期大学で実施した「総合表現Ⅰ」の授業方法と学生の自由記述による授業の感想、自己点検・自己評価アンケートの回答結果を調査し、当科目において学生が修得した学び、気づきを考察する。従来、当科目は、音楽表現分野と身体表現分野が独立して授業を行っていたが、学生が両表現分野を相互に理解し、横断的に修得できるように第1回と最終回に両分野の授業を合同で行った。授業最終回には発表会を開催し、授業で修得した表現活動を実践に結び付ける取り組みを行った。

授業を通し学生は、両表現分野は密接に関係していること、他者の表現活動から学ぶことの重要性、表現方法の多様さやグループ内の活発な意見交換の必要性、他者のアイデアを認め共有することの大切さなどを述べていた。このように学生は、授業を通し、様々な学びを深めていったことがアンケート結果から判明した。

キーワード：音楽表現，身体表現，幼児教育，リトミック，教科融合

1. はじめに

保育者養成校における保育内容「表現」の授業内容に関わる研究は多数存在し、多様な授業方法が紹介されている。例えば、音楽表現活動を中心に「歌唱」「リズム」「身体表現」を取り入れた授業計画¹⁾について、「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を複合的に経験・習得することを目指した取り組みの研究²⁾、「音楽表現」と「身体表現」のそれぞれの担当教員が相互に授業を観察することによって、両分野の関りを捉えることを試みた研究³⁾等がある。

滋賀短期大学幼児教育保育学科では、保育内容「表現」において、音楽表現と身体表現の演習科目

*1 E-mail: n-matsui@sumire.ac.jp *2 滋賀短期大学非常勤講師

である「総合表現Ⅰ」を設置している。従来当科目は、音楽表現の分野と身体による表現の分野をそれぞれの専門分野の教員2名が全15回を（オリエンテーションを1回含む）授業の前半7回（音楽表現分野）、後半7回（身体表現分野）を担当し、それぞれが独立して授業を行っていた。両分野の担当教員は、保育や教育の現場において身体と音楽が融合した表現活動を実践していた経験があり、両分野の学びは別々ではなく、相互に関連しあっていることを学生が認識できるよう授業方法を検討したいと考えた。

このような問題意識のもと、2016年度は初めての試みとして、ことば・音楽を中心とした「音楽表現」と身体の動きと音を中心とした「身体表現」を融合し、さらなる知識を加えた総合的な実践力を学生に身に付けてもらうために、授業初回と最終回のまとめの発表会を合同で実施した。

本稿では、授業初回に実施した身体表現と音楽表現が融合した合同授業終了後に実施した自由記述による感想と最終回に実施した自己点検・自己評価アンケートの結果と自由記述による感想をもとに、身体表現と音楽表現が融合した「総合表現Ⅰ」の授業において学生が修得した学び、気づきについて考察する。

2. 研究の背景と目的

本研究は、学生が身体表現と音楽表現が融合した授業を経験することにより、音と身体の結びつきを認識することを目的とした。その認識から得た知識や表現方法を発表会に結びつけるという授業展開を検討したのは、もう1つねらいがある。ここで、本学のカリキュラムについて説明する。本学は、保育内容「表現」における演習科目に「総合表現Ⅰ」、「総合表現Ⅱ」を設置している。「総合表現Ⅰ」は保育士資格、幼稚園教諭資格の必修科目である。総合表現Ⅰは、1回生の後期に履修し、身体表現と音楽表現の両分野を修得することを授業の目的にしている。総合表現Ⅱは、2回生の前期に履修する。影絵、オペレッタ、ダンスの3つの表現分野から学生が一つ選択し、任意のグループによる制作活動を行い、授業最終回に発表会を開催する。このように総合表現Ⅱは、将来の保育現場での活動を鑑みた実践的な科目である。そこで総合表現Ⅰでは、総合表現Ⅱへむけた継続的な学びができるよう授業を計画した。総合表現Ⅰにおいてもグループによる発表会を授業内に設け、学生がコミュニケーション力や自己表現力を身に付け、人前で表現することに慣れることを目指した。

3. 研究方法

「総合表現Ⅰ」の第1回の合同授業後と第15回（最終回）の発表会後に行った自由記述による授業の感想と最終回に実施した質問紙調査による自己点検・自己評価表を分析し、考察する。

3.1 アンケート調査の概要

- ・第1回の授業 実施日：2016年9月26日

身体表現と音楽表現が融合した授業内容に対する自由記述による感想（記名）を授業終了時に実施

し、その場で回収した。

・第15回の授業 実施日：2017年1月23日

授業最終回に開催した発表会后に、自由記述による感想（記名）と質問紙調査による「自己点検・自己評価表」（記名）のアンケートを実施し、その場で回収した。

「自己点検・自己評価表」の設問は表1のとおりである。

表1で示した設問内容に「大変良くてできた」「良くてできた」「できた」「ややできなかった」「できなかった」の5段階で評価をした。

表1 自己点検・自己評価アンケートの設問（高橋仁美 作成）

自己認識	グループにおける役割分担と自分のポジションを認識できたか
コミュニケーション	状況に応じてメンバーと適切なコミュニケーションをとることができたか
情報分析	適切な手段で情報を収集することができたか

3.2 調査対象者

2016年度に幼児教育保育学科で「総合表現Ⅰ」を履修し、2017年度に「総合表現Ⅱ」において身体表現と音楽表現が作品に深く関わるオペレッタ、ダンスを選択した88名（男子学生7名、女子学生81名）を選出した。今後、今回の調査対象者に総合表現Ⅰと総合表現Ⅱを通した授業内容に関するアンケート調査を実施し、分析する予定である。

3.3 倫理的配慮

本アンケート調査は、授業内容の向上を目的としたもので、調査結果のデータは研究以外に使用しないこと、個人情報を開示しないことを学生に説明し、了承を得た。

4. 総合表現Ⅰの授業について

総合表現Ⅰは、授業初回と最終回に音楽表現と身体表現による合同授業を教員2名で連携して行った。また、授業最終回にグループによる発表を課題とした。第2回以降の授業の組み立ては、従来通り各分野に分かれ、基本的な表現の知識を修得するための演習授業を前半に、最終回のグループによる発表の準備や練習を後半に行った（表2）。発表課題の制作は学生が主体となり、それぞれ前半に実施した演習授業の過程で修得した知識や表現方法を取り入れ、活かしながら協働で取り組んだ。また、各回の授業終了後は、教員間でミーティングを行い授業の進捗状況など情報を共有した。

身体表現と音楽表現の融合を目指して

表 2 2016 年度 総合表現 I 授業計画

第 1 回	ガイダンス 動く活動	☆合同授業 体育館
音楽表現		
第 2 回	乳幼児の音楽教育と音楽指導法の歴史	音楽室
第 3 回	聴く活動 指導法と実践	音楽室
第 4 回	歌う活動 指導法と実践	音楽室
第 5 回	弾く活動 指導法と実践	音楽室
第 6 回	つくる活動 指導法と実践	音楽室
第 7 回	まとめ	音楽室
身体表現		
第 8 回	乳幼児期の心身の発育・発達について	体育館
第 9 回	実践例をもとに 体を操る活動	体育館
第 10 回	実践例をもとに 体を操る活動	体育館
第 11 回	実践例をもとに 体を操る活動	体育館
第 12 回	つくる活動	体育館
第 13 回	まとめ	体育館
第 14 回	リハーサル	体育館・すみれホール
第 15 回	発表 まとめ	☆合同授業 すみれホール

4.1 第 1 回の授業内容

第 1 回は、本論文のテーマである身体表現と音楽表現の相互関係を学生に実感してもらうことを第一目標とし、リトミックを授業の主軸に置いた。授業内容は、リトミックの要素の 1 つである即時反応を中心に、音を聴くということ、聴こえた音に反応し身体全体で表現する楽しさや多様な表現方法を体験するということである。具体的な例を挙げると、歩行によるストップ&ゴーの活動の際、音楽を注意深く聴き、音楽が始まると歩行し、音楽がストップすると静止し、その後それぞれがポーズを創造し身体表現をする活動を実施した。また、ストップ&ゴーの 2 人で歩行する活動では、音楽に合わせて 1 人で歩行し止まる場合、2 人で一緒に歩行し止まる場合、どのような身体動作の違いがあるのかを比較し、保育現場でこれらの活動を実施する場合の対象年齢について、現場での実践における配慮事項などを学生に問いながら授業を進行した。

リトミックを通して学生は、音楽表現と身体表現の結びつきを実感するだけでなく、音に対する集中力や身体全体でリズム感覚を養うこともできる。リトミックの創始者、エミール・ジャック＝ダルクローズ (Émile Jaques-Dalcroze 1865-1950) は、「音の意識は、耳と声の反復経験によってのみ形成

されるものであり、リズムの意識は、身体全体の動きの反復経験によってのみ発達することができる⁴⁾。」と述べ、「筋肉組織はリズムを知覚する⁵⁾」と定義している。リトミックを授業の導入として用いたことは、学生の音楽的スキルの修得と同時に、表現するための感性を育成させることができ、大変有効な手法であったと考える。

第1回の授業のまとめとして、現場で実践できる「あそび」を通じた表現の活動例を示した。授業では、「聴く、動く、見る、考える」に対応できるようにテーマを設けた。活動において、学生が3歳児～5歳児(子どもたち)と実際の年齢(保育者としての立場)とを行き来して考え、その結果どのような発見があったかを振り返り考察するよう求めた。実習では、常に子どもの姿を観察することが必要になる。学生は、観察することによって様々な視点で物事を考え、判断し、行動に移すことが保育現場では必要不可欠であると実感したのではないかと考える。

第1回の演習授業の締めくくりに、学生全員でストレッチ体操を実施した。身体表現の担当教員が心身共に柔軟な動き方や考え方が出来るようにストレッチ体操を行い、その身体の動きを見ながら音楽表現の担当教員が即興でピアノを演奏した。

4.2 発表会について

第1回の授業では、最終回にグループ発表を実施することを告知した。発表会の内容や課題曲、そして今後の授業形態や発表会に向けた準備方法について以下のように設定した。

〈発表会について〉

発表内容

- ・授業で修得した身体表現と音楽表現を取り入れた発表内容にすること
- ・子どもたちに分かりやすい内容で、子どもたちも一緒に表現してみたいと思える内容にすること

課題曲 ジングルベル

きよしこの夜

赤鼻のトナカイ

サンタがまちにやってくる

おめでとうクリスマス

あわてんぼうのサンタクロース

*グループで話し合い、原則1曲を選曲する

準備・練習方法

第2回以降の各分野の演習授業で修得した知識や表現方法を選曲した楽曲に活かしながらグループ討議し、楽器を使用する箇所や身体表現する際のフォーメーションなどを記録する

各グループに分かれて、歌唱の練習を行い、各グループで採用した楽器や道具を使用し練習する

*第14回は、最終発表会の場所(舞台)でリハーサルを行う

練習場所

音楽表現の練習場所は、音環境に配慮し、演習授業の教室以外に隣接する音楽室を使用した
身体表現は、体育館で行った

楽器・道具の手配

グループ毎に使用する楽器を事前に教員に連絡し、教員が貸し借りのアレンジを行った

2016年度は、親しみやすく、オノマトペが含まれた比較的楽器の使用や身体表現が取り入れやすいクリスマスソングを教員が選曲した。課題曲の楽譜は、初級レベル程度のピアノ片手伴奏譜でコードが楽譜に記載されたものを参考に配付した。

各回の授業の修得内容を最終発表の課題曲に取り入れると述べたが、ここで具体的に実施した内容を紹介する。音楽表現の授業では、第4回の「歌う活動」の授業において、幼児の発達と声域、リズムと音程、子どもの歌の歴史、わらべうた、手遊び、オノマトペを使った楽曲について授業を行った。また実践活動として、歌唱指導の方法や教材選択の留意点、歌あそびの活動例を挙げた演習授業を実施した。オノマトペでは、様々な表現の工夫（楽器の使用や身体表現など）ができることを紹介した。第5回の「弾く活動」では楽器遊びの意義、楽器を弾く際の援助、演奏方法、様々な楽器を紹介し、実践活動として合奏を行った。また、ピアノによる表現方法として、イメージサウンド⁶⁾を紹介した。全体による演習授業の後に、発表のグループに分かれ、発表会の課題曲に使用したい楽器を試しながら楽器の選択を行った。クリスマスソングということで、鈴、スレーベル、タンブリン、バーチャイムなどを選択した学生が多い中、コンガを選択する学生もおり、自由な発想で楽器選びを行っていた。また、演習授業でコードによるハンドベルの奏法を紹介した直後の発表会の練習では、曲中のある部分だけをコードネームに従って演奏するなど、授業で修得した様々な知識を取り入れて準備を行っていた。

身体表現の授業では、音を注意深く聴き、ビートを身体全体で感じて様々なステップの種類を学んだ。修得したステップを発表課題のクリスマスソングに取り入れ、フープ、ボール、スカーフなどの道具と楽器を組み合わせて仕上げの作業を行った。このように、両分野で修得した知識や技術を積み重ねながら、グループ創作のプロセスや多様なフォーメーションの方法を修得していった。

第2回から第13回までは、以上の演習授業と発表の準備・練習を実施し、第14回はステージリハーサルを行い、第15回の発表会に結び付けた。発表会では、ただ鑑賞するだけでなく、各グループの発表を観察することを課した。観察シート（表3）を作成し、各グループの発表テーマや音楽表現、身体表現が作品にどのように活かされているかを観察し、記述することを求めた。

表3 観察シート

曲目	人数	イメージ	使用楽器	コメント

5. アンケートの調査結果と考察

5.1 第1回 自由記述の感想

身体表現と音楽表現の融合を認識することを目指した第1回の授業内容に対する自由記述による感想を以下に紹介する。

- ・リズム活動の楽しさを味わえた。
- ・音楽と身体運動を融合させることでリズム感、即時力、表現力を養うことができる。子どもたちは表現力が豊かなので私たちと違った動きをするのではないかと想像しながら授業を受けた。
- ・ストレッチは音楽に合わせてすることで、音楽がない時よりも動きがわかりやすくやりやすかった。
- ・ストレッチ体操について、そこにピアノの音があるのとないのでは雰囲気が変わってくるなど思った。
- ・身体の動きは音楽で表現でき、動きは音楽で表現できることが分かった。
- ・音楽を聞くことはみんな同じであるが表現の仕方は人それぞれ違う。
- ・音に合わせて体を動かし、音の違いを聞きわけ判断し、自分で表現するのは難しく恥ずかしさもああったが、人と一緒に身体を動かすのは楽しいことだと思った。
- ・音楽を使った体の動かし方は保育現場にでた際に使えるものばかりでとても勉強になった。
- ・体操も音に合わせてするのは初めてでピアノで私たちの動きに合わせてもらって楽しくなる体操でした
- ・音楽を使って体を動かすことにより、音楽の楽しさと体を動かす楽しさを知れるということを感じました。また友達同士の人間関係もより良いものへとつながり、コミュニケーションをはかれるといったことに気づきました。

5.2 第1回の授業内容の感想に対する考察

アンケート調査の結果から、身体表現と音楽表現が相互に関係していることを実感できたという感想が多数あり、教員が意図した授業のねらいを学生が受容し、反省していたことが明らかになった。学生の記述にあるように、表現方法は、多様であること、音楽に合わせて身体を動かすことの楽しさを感じる一方、人前で自我を開放し、表現するという、非日常の状況で表現することの難しさを感じた学生もいた。注目すべき感想は、このような集団での表現活動を通して、社会性やコミュニケーシ

ョン力などを身に付けることの大切さに気づいたという記述である。佐々木は、特に身体を動かす表現活動は「ごっこ遊び」の延長線上にある⁷⁾と定義し、次のように述べている。

「子どもの経験の中に点在するさまざまな感動を取り出し、自分なりのアイデアやこだわりを発揮しながらイメージを膨らませ、それになりきって遊ぶ。何かのために、美しさや完成されたものを目指すのとは異なり、『自分なりの表現』に没頭する。自分自身の思いをすなおに表現できる場所は、自己肯定感も膨らみ、そのことにより、他の個性を知り、交わり受け入れていくことにもつながっていく⁸⁾。」

近年、保育者を目指す学生の中に、子どもの姿が分からないと訴える学生は少なくない。かつて学生も子ども時代を過ごし、発達段階に応じて人間関係や社会的スキルを体得していった。今回の授業を通し、学生が実際に子どもたちの目線になって活動することで、子どもの頃に培った感性や感覚を呼び覚まし、改めて気づくことができたのではないかと考える。

5.3 第15回 自由記述の感想

授業最終回の発表会後の自由記述による感想は、以下のとおりである。

- ・たくさん楽器、身体表現を学ぶことができた。皆で協力し一つのことを作ることはこれからに向けて必要なことだと感じた。
- ・授業で学んだことをこれからの授業や保育現場でも使っていきたい。
- ・発表は見ることも大切。
- ・発表では他のグループのも見れ、色んな表現を自分の中に取り入れていけるとよいと思った。
- ・子どもたちの前でいかに楽しく分かりやすくできるかが重要となると思った。色々な表現の仕方がありどの時間も参考になった。
- ・発表を通して改めて友達と協力するということが学べた。一人では思いつかない振付ができて人の案を聞くことも大切だと思った。
- ・就職してから発表会などで今回の授業のようにダンスや楽器を使って考えたりしないといけないと思うので非常に役立つ経験だった。他のグループの発表を見て工夫していることがたくさんあり勉強になった。
- ・他のチームの発表をみて、同じ曲でもこんなに違うんだ、フープを使うやり方もあるんだと色々な発見があって発表するだけでなく見ることも勉強になった。
- ・様々な表現の仕方があることに気づけた。
- ・しっかりと練習をして発表すること。いろいろな意見をだしていくこと。
- ・身体を音楽に合わせて動かすことの楽しさを知った。

- ・もっと工夫したらよい作品になった。これを活かしてまた次の取り組みに励みたい。
- ・発表の時は緊張したけれど、こうやってグループで活動するのは楽しかった。
- ・チームワークを築くためには話し合いやぶつかり合いが大切だ。
- ・音楽とダンスは子どもたちが大好きなことなので先生を目指す自分たちがもっと理解をしなければいけないことがたくさんある。
- ・この授業のおかげで人前で踊ったりするのが苦手ではなくなってきた。

5.4 第15回の授業内容の感想に対する考察

自由記述によるアンケートから、発表終了後の達成感、活発な意見交換の必要性、他者のアイデアを認め共有すること、さらに将来現場で実践する際の意欲を述べていたことが分かった。人前での発表に関して、楽しむことができたと記述した学生もいた。自ら表現することを楽しむことは、将来保育者を目指す者にとっては重要なことである。なぜなら、保育者が心から楽しみ表現することができなければ、子どもたちも当然楽しむことができないからだ。子どもたちと表現する喜びを分かち合うためには、保育者が心から表現を楽しむことが必要である。

発表会を通し学生は、多面的な視点を持つこと、協働して取り組むことの大切さを学んだことが明らかになった。

5.5 自己点検・自己評価調査の結果

授業最終回に実施した自己点検・自己評価では、「コミュニケーション」「自己認識」「情報収集」の3つの項目に対して回答を求めた。アンケート結果を図1-3に示す。

図1 『自己認識』 グループにおける役割分担と、自分のポジションを認識できたか

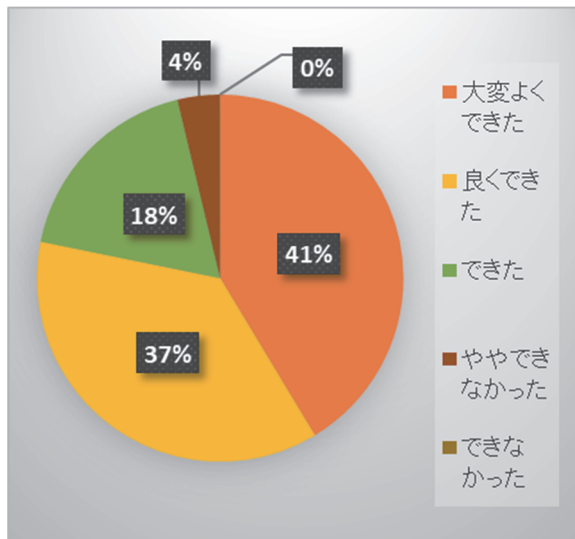


図2 『コミュニケーション』 状況に応じて、メンバーと適切なコミュニケーションをとることができたか

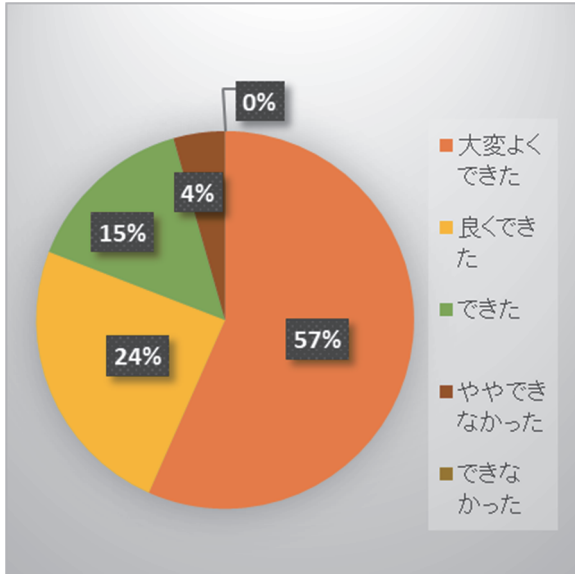
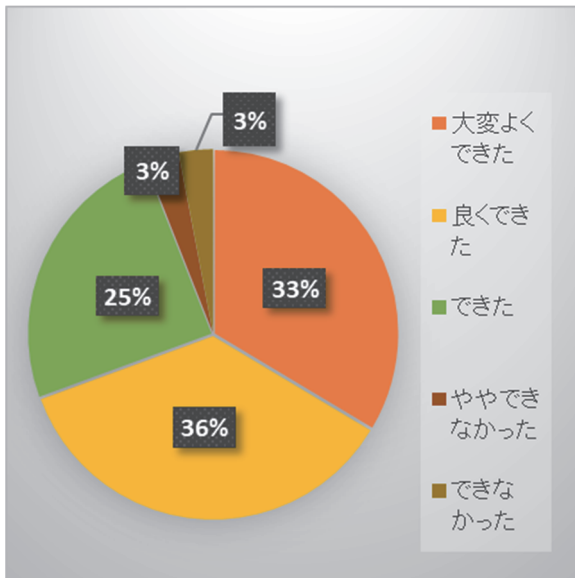


図3 『情報収集』 適切な手段で情報を収集することができたか



5.6 自己点検・自己評価調査の結果に対する考察

自己点検・自己評価のアンケート結果では、「コミュニケーション」、「自己認識」の項目で「できなかった」と回答した学生はおらず、大多数の学生は「できた」と回答した。したがって、それぞ

れのグループが協働し、発表までのプロセスを有意義に取り組むことができたと分析する。一方で、「情報収集」のアンケート結果はできなかつたと回答した学生が4名いた。「情報収集」とは、楽譜の選択や音楽の編集に関することである。授業時間の関係上、表現の時間内で音楽の編集等を指導することは難しく課題として残るが、今後他の教科と連携することも可能ではないかと考える。

発表会の課題曲の選曲においては、今回のように季節の楽曲に縛られず、より現場にニーズのある楽曲の選択も考慮しなければならない。ハード面に関しても音楽編集ソフトや楽器、道具の種類や数を充実させ、学習環境の整備を検討しなければならない。

6. まとめ

本研究は、従来の授業形態では、学生の知識修得にかなりの格差が生じるため、限られた授業時間内で身体表現分野と音楽表現分野を単独ではなく、横断的な学びと捉えることを目的とした初めての試みである。本研究のように、第1回の授業に身体表現と音楽表現を融合した内容を計画し、学生が経験することによって、第2回以降の各分野に分かれた授業であっても、当初掲げた大きなコンセプトが各回の授業で随所に関わっていることを認識できたのではないかと考える。前述した大きなコンセプトを学生に明確に提示したことにより、継続的な学びを積み重ねていったことが、各アンケート調査の結果や感想から実証することができた。

2016年度は、教員間で「総合表現Ⅰ」の到達目標を協議し、共通の見解をもち授業を展開でき、有意義に授業を計画することができた。授業を通して学生は、多様な表現方法を体験することはもちろん、コミュニケーション力、他者の表現から学ぶことの重要性、人前で自己を表現することについて多角的な視点で学ぶことができたと考える。発表を授業最終回に設けたことで、大多数の学生は、毎回の授業に意欲的に取り組む姿がみられ、その結果、授業の活性化を図ることができた。

今後もこのような横断的な学びの体験を経て、保育・教育現場の実践に活用することができる授業を実施できるよう、表現活動をはじめ総合的な力を兼ね備えた人材育成に努めたいと考える。

本稿は、日本音楽表現学会第15回大会、2017年6月における口頭発表の内容をもとに執筆したものである。

文献

- 1) 桐原礼(2011), 幼稚園教諭・保育士養成課程学生の「音楽表現指導法」における学び, 千葉経済大学短期大学部研究紀要, 第7号, p111-p120
- 2) 小笠原大輔(2012), 「保育内容(表現)における複合的教材の試み—「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を一度に楽しむ—, 文教学院大学人間学部研究紀要, vol.13, p341
- 3) 坪倉紀代子, 金勝裕子(2004), 表現演習における音楽表現と身体表現の授業内容に関する検討, 十文字学

身体表現と音楽表現の融合を目指して

園女子大学人間生活学部紀要, 2 巻, p 19

- 4) ダルクローズ, エミールジャック/山本昌夫訳 (2003), リズムと音楽と教育 第1版第12刷,
監修 板野平, p 44, 全音楽譜出版, 東京
- 5) 同上, p 45
- 6) 石井恵子 大見由香 鎌形由紀乃 竹内アンナ (2011), 幼児のための音楽教育 第2刷,
監修・編著 神原雅之 鈴木恵津子, p 166-p 167, 教育芸術社, 東京
- 7) 佐々木由喜子 (2016), 実践保育内容シリーズ⑤音楽表現 初版第3刷, 一藝社, 監修 谷田貝公昭,
編著 三森桂子・小嶋エマ, p 84
- 8) 同上, p 84-p 85